

J.M.Synge の紀行文におけるナショナリズムの問題点

池 田 俊 也

I

シング (John Millington Synge, 1871-1909) の死後一年が経過して、全集 (Maunsel 版) 出版の作業が行われた時、編者の一人であった W.B. イェイツは紀行文の一つ 'In Connemara' (writ. 1905) を全集から除外することを強く主張した。他の作品と較べ、質的に劣っていて、友人の評判を落しかねないというのがその理由であった。「美しい彫像のように完璧で優れた作品を残すことこそシングの幸運となるだろう」¹とイェイツは考えたのである。では何故、イェイツはこの作品を劣っていると評したのか。それは、作品がアイルランドの中でも特に貧しい Connemara 地方の農民の悲惨な生活を飾ることなくリアルに描いたものであり、そこには行政の対策を批判し、作者独自の救済案を提示する箇所さえみられ、その点で、農民との素朴な交流に重点がおかれた他の紀行文とは趣きの変った社会学的なレポートとなっていたからだと思われる。アイルランド文学運動に詩的でロマンティックなものを求めているイェイツ²にとって、'In Connemara' はその理念とは相入れなかったのである。

だが、それ以上にイェイツを頑にさせたのは、作品の視点が日頃から自分の抱いていたシング像とは全く矛盾していたことであった。彼はこの全集のために準備していた「序文」の中で、シングについて次のように述べている。

Synge seemed by nature unfitted to think a political thought, and with the exception of one sentence, spoken when I first met him in Paris, that implied some sort of Nationalist conviction, I cannot remember that he spoke of politics or showed any interest in men in the mass, or in any subject that is studied through abstractions and statistics.³

ここで言う 'one sentence' とは 'England will never give us freedom until she feels she is safe.'⁴ であったと後にイェイツは語っている。では彼の目に映じたこのような保守的なシング像と農民救済を訴える改革的なナショナリストとしてのシング像と果してどちらがより彼の実像に近かったのだろうか。

そこで生前シングと交友のあった知人たちの言葉を拾ってみると実に様々なシング像が浮び上がってくる。⁵ その中で、イェイツと全く正反対の意見を述べているのは、パリ滞在中から晩年まで、シングと一番長い交遊のあったジャーナリスト Stephen MacKenna で、彼は次のように回想している。

As regards political interest, I would die for the theory that Synge was most intensely Nationalist; he habitually spoke with rage and bitter baleful eyes, of the English in Ireland, though he was proud of his own remote Englishry...⁶

イエイツの場合 *A Vision* (1925) にもみられるように、文人や知人を個人的な神話体系の枠の中に入れて、その性格、理想像をことさらに強調する癖があるが、シングに関して言えば、「主観」から「客観」へと移行していく過程で捉えている。それは「シングに政治的な関心が全くなかったからこそ、農民のありのままの姿を客観的に描くことができた」という信念⁷に基づくものであった。彼は、'He could walk the roadside all day with some poor man without any desire to do him good or for any reason except that he liked him.'⁸ とさえ言い切っている。一方 MacKenna の場合、ラディカルなナショナリストから発せられたシング批判に答えて反論したものであり、感情的で幾分か誇張された面もなくはなく、差し引いて考えなければならぬところも確かにある。しかし、実は MacKenna のこの言葉の裏にシングが宿命的に背負っていた微妙なナショナリティの問題がかくされているのだ。それは、同時に、イエイツの頑迷とも思える言葉とも無関係ではない。

MacKenna が 'remote Englishry' と指摘しているようにシングはイギリス人を先祖にもつ Anglo-Irish の出身であった。しかも、家系的にはアイルランド国教会に属するプロテスタントで、5人もの主教を出した計りでなく、地主と姻籍関係を結ぶことによって、アイルランド各地に広大な土地を所有する支配階級、いわゆる Anglo-Irish Ascendancy の血を受け継いでいた。このような Anglo-Irish の作家が民族、宗教、文化の点で全く異質の伝統をもったアイルランドの風土を描こうとする時、出自であるイギリス本土の文化を拒絶して、極端なまでにアイルランドを美化して語ろうとする心理が働くことは批評家の一致して説くところである。⁹ イェイツはその典型的人物であり、彼はイギリスの伝統、文化を完全に否定して、アイルランドを美化し、そこに自らの national identity を求めたが、結局アイルランド固有の文化とのギャップを埋め合わせることができずに、イギリスでもなくアイルランドでもない Anglo-Irish 独自の世界にナショナリズムを描くようになった。¹⁰ そのようなイエイツがシングの描くアイルランド農民の世界を現実とは無縁な芸術的に純粋なパストラルの世界と受けとったとしても何ら不思議ではなかった。

確かに、出発点においてイギリスの伝統を拒絶したということではシングもイエイツと同様であった。それにはプロテスタント信仰の棄教という形をとって現われた。19世紀後半になって農地解放を求めるカトリック中小農民の運動が高まるにつれて、Anglo-Irish Ascendancy の側に動揺がおこった。イギリス本国へ引き上げる地主もいれば、土地を守ろうとして官憲の力に頼る地主も現われた。この騒擾の中でシング家がとった道はピューリタンの信仰に帰依することであった。シングの母親の生活と完教教育が如何に厳格なピューリタニズムに彩られていたかは『伝記』を読めば明らかだが、ここで大切なことは、信仰を守ることは即ち Anglo-Irish Ascendancy としての文化、伝統の一切を守ることに他ならなかったということである。それは政治的にはイギリスとの併合を

目指す Unionism の考えに繋がる。従って、シングにとって、棄教は Ascendancy の側からのドロップアウトを意味していた。ダーウィニズムを初めとする当時の科学的実証主義の流行を考えると、それが意識的なものであったかどうかは確証はないが、結果としてシングが信仰に代わるものとして意識的にアイルランドに向ったことは明らかである。

1892年、21歳の時に書いた次のような断片が残っている。

Soon after I had relinquished the Kingdom of God I began to take a real interest in the kingdom of Ireland. My politics went round from a vigorous and unreasoning loyalty to a temperate Nationalism. Everything Irish became sacred...and had a charm that was neither quite human nor divine, rather perhaps as if I had fallen in love with a goddess...(13)¹¹

この自伝的断片にあるアイルランドのイメージは漠然として明瞭さに欠けるが、重要なことは、シングがアイルランドをピューリタニズムに対する信仰と同じレベルで捉えていることである。現実のアイルランドとは無関係に、憧れにも似た気持ちでアイルランドをイメージ化していると言ってもいい。こうした理念的なナショナリズムがイギリスからの完全分離独立を希求する民族主義者たちのナショナリズムに接する時、矛盾が生じてもおかしくはない。シングはパリで革命家の集り 'Association Irlandaise' に積極的に参加するが、武力抗争をも辞さないラディカルな思想に限界を感じて退会する。その時、会の主宰者であった Maud Gonne に宛てた書簡の中で 'I wish to work in my own way for the cause of Ireland.'¹² と書いている。これは彼のナショナリズムが個人的なものであったことを良く物語っている。

ここにイエイツとの決定的な違いがあった。イエイツはこのような民族運動の中に身を投じ、その中でアイルランド文学運動を推進しようとするが挫折し、Anglo-Irish の伝統へ帰っていった。逆に言えば、運動の際中も Anglo-Irish の立場にこだわり続け、その伝統を捨てることはできなかった。次の言葉がそれを良く示している。

There are two kinds of patriotism in Ireland...the patriotism of Catholic Ireland, which is inherited, and to which a man holds because he will not change. Then there is the patriotism of those who have grown up in the Church of Ireland, and that has its own special meaning—but in it there is always a choice.¹³

シングの場合、イエイツのように意識の中でこの二者択一の問題に悩むことはなかった。その伝統がアイルランドでは完全に失われたことを実感として感じとっていたからである。'In Wicklow'(1910) 中の一文で、彼は 'Still, this class, with its many genuine qualities, had little patriotism, in the right sense, few ideas, and no seed for future life, so it has gone to the wall.' (231n) と述べているが、ここには一般的なノスタルジア以外の何も読みとることはできない。

こうしてシングはプロテスタント Ascendancy の立場を離れ、民族主義的ナショナリストの側には与しない独自のナショナリズムを抱き始めるわけだが、その対象となったのはアイルランド土着の農民たちであった。1889年にアラン島に初めて渡って以来、1902年まで日数にして5ヶ月余りを島民の中で暮している。又、1905年にはアイルランドの西部、West Kerry, Connemara に旅し、一方で、少年時代から夏のほとんどを Wicklow の山荘で送りながら、農民と交っている。その成果として、四編の紀行文とそこに題材をおいた農民劇五編を上梓している。そこで、問題にしたのはこうした作品の中で、シングが農民を完全に理解し、表現しえたかということである。ここで扱う四編の紀行文〔実際は *The Aran Islands* (1907) と、後に合本化され、一つに纏められた。 *In Wicklow, West Kerry, Connemara* (1910) の二作となっている〕に絞っていえば、農民に対するシングの視点が微妙に変化している。*The Aran Islands* でのシングは島民の生活様式、人間性を 'primitive-ness' という語を多用して描写している。この語自体は彼にとって正の要因であるのだが、彼は自分の位置をその対極にある負の要因、即ち 'civilization' という語で表わしている。この 'civilization' がイギリスの物質主義、商業主義に代表される文明であることは次の文を読めば解る。

The thought that this island will gradually yield to the ruthlessness of "progress" is as the certainty that decaying age is moving always nearer the cheeks it is your ecstasy to kiss. How much of Ireland was formerly like this and how much of Ireland is today Anglicized and civilized and brutalized...? (103n)

つまり、シングはアラン島を文明に冒される以前の楽園的なコミュニティとして捉えているのである。これはとりもなおさず、イギリスの文化、伝統を否定したシングがアイルランドの文化に傾斜する余り、'civilization' と 'primitiveness' という図式的な見方でしかアラン島を見ることができなかったことの証左ではないか。ところが、*In Wicklow, West Kerry, Connemara* になると、アラン島に見たような楽園的性格はすっかり消え失せてしまい、そこで描かれる農民の姿は地上に息づく人間そのものへと変わってしまっている。二・三の例外を徐くと、ここでシングは貧困と、そこから生じてくる出稼ぎ、移民、過疎といったアイルランドの現実の問題を赤裸々に描いている。こうしたリアルな現実描写と具体的な救済措置を講じようとする動きは *The Aran Islands* の中には見られないものである。そこに、何らかの心理的変化があったと考えなければならない。勿論、両者の創作年代にかなりの開きがある以上、農民に対する見方に急激な変化があったのではなく、シングの関心が少しずつ変容していったのであろうが、この二つの作品の間でシングの意識に、現実から目を逸らさぬ冷静さが備わったように思える。言葉を換えれば、ナショナリストとしてのアイデンティティをシングが確立したとも言えよう。それが、Daniel Corkery の言うような「文化的ナショナリズム」¹⁴ であろうと、又、Nicholas Grene が言うような「審美的ナショナリズム」¹⁵ であろうと、シングがアイルランド人としてなすべきことを自分流の方法でなそうとしていることは事実であり、そこに明確なナショナリズムの基盤があったことは否定できないことである。以下、本稿では

紀行文にみられるシングのナショナリズムの問題について論じることにする。

II

最初のアラン島訪問からの帰途、シングはスケッチノートの端にこう記している。

Am I not leaving in Inishmaan spiritual treasure unexplored whose presence is a great magnet to my soul? In this ocean is [there] not every symbol of the cosmos?(103n)

この「強く心を魅きつけて止まぬ魂の宝」が自伝的断片の中にあったアイルランドの擬人化、'goddess'の顕現であると見てよい。つまり、シングが大陸に暮らしながら漠然として求め続けていた魂の帰属すべきアイルランドであったということである。唯、ここで注目したいのは、言葉を続けてこの島を「宇宙のあらゆるシンボル」の顕在化する場所として受け取っていたということである。このような対象の捉え方はシングがソルボンヌ大学に籍を置きながら、古代ゲール、ブルターニュの文化に文化人類学的な関心を寄せていた事実と無関係ではない。世紀末のパリで文明の行き着く果てを見たシングが現代ヨーロッパにはすでに見られなくなった人間の素朴な営みをアラン島に見い出したのである。つまり、シングはあくまでも観察者としてアイルランドの文化、伝統がコンパクトに凝縮されたものをアラン島に見ようとしているのである。'I have given a direct account of my life on the islands, and of what I met with among them, inventing, and changing nothing that is essential.' (47)と「序文」でシングは語っているが、そこには島民の生活に対する関心を表わす言葉の他、彼らに対する sympathy に類する言葉は見られない。このようなシングの姿勢を端的に表わした箇所として次の文を掲げておこう。

... they seem in a certain sense to approach more nearly to the finer types of our aristocracies—who are bred artificially to a natural ideal—than to the labourer or citizen, as the wild horse resembles the thoroughbred rather than the hack or cart-horse. Tribes of the same natural development are, perhaps, frequent in half-civilized countries, but here a touch of the refinement of old societies is blended, with singular effect, among the qualities of the wild animal. (66)

島民の肉体的な逞しさ、野性的な特徴を通してその中にひそむ純粹培養されたアイルランドの文化、伝統の核を見ようとするシングの目がここにあるのだ。

彼はこのアラン島民の特徴を 'primitiveness' という言葉で表現する。先に書いたように、'primitiveness' は無味乾燥な人間不在の近代化、商業主義を必然的に伴った 'civilization' と対峙する時価値をもってくる。

It gave me a moment of exquisite satisfaction to find myself moving away from *civilisation* in this rude canvas canoe of a model that has served *primitive* races since men first went on the sea. (57) (イタリック体は筆者)

'primitiveness' が正の要因であるのは現代人が文明の発達段階で失ってきた人間の心の豊かさを有しているからである。その豊かさは自然との交わりの中から生じてくるとシングは考える。例えば、自然そのものや自然現象の働きによって島民は突然変貌し内奥の意識を日常の中に現出させる。

The continual passing in this island between the misery of last night and the splendour of to-day, seems to create an affinity between the moods of these people and the moods of varying rapture and dismay that are frequent in artists, and in certain forms of alienation. (74)

天候の絶え間ない変化が島民の喜怒哀楽の率直な感情表現と表裏の関係をなしていることは彼らが自然と一体化していることを物語る。この「自然の共鳴」(a sympathy between man and nature, 75) を良く表わしたものとして老婆の葬儀のエピソードを掲げたい。葬儀の途中に突然轟いた雷鳴によって、そこに集った島民は、老婆の死を無意識のうちに抱いている自己の絶望的な死の恐怖とオーバーラップさせ、普遍的な運命の冷酷さを認識する。

This grief of the keen is no personal complaint for the death of one woman over eighty years, but seems to contain the whole passionate rage that lurks somewhere in every native of the island. In this cry of pain the inner consciousness of the people seems to lay itself bare for an instant, and to reveal the mood of beings who feel their isolation in the face of a universe that wars on them with winds and seas. (75)

この人間的な豊かさがシングがアラン島で発見した中で最も重要であることは、'Its human value is given largely by its intensity and its richness, for if it is rich it is many-sided or universal...' (350) というこれより十年後の「演劇論」の一節をみても明らかである。

だが、このような人と自然との緊密な交わりと自然の中に普遍的なものを見るという点に、アイルランド民族特有の性質があると考えていたのは何もシングだけではなかった。イエイツも同様にアイルランド、ケルト民族の中にその性質を見出し賞讃していた。

They worshipped nature and the abundance of nature, and had always, as it seems, for a supreme ritual that tumultuous dance among the hills or in the depths of the woods, where unearthly ecstasy fell upon the dancers, until they seemed the gods or the godlike beasts,

and felt their souls overtopping the moon; and, as some think, imagined for the first time in the world the blessed country of the gods and of the happy dead. They had imaginative passions because they did not live within our own strait limits, and were nearer to ancient chaos, every man's desire, and had immortal models about them.¹⁶

イエイツのこの文が葬儀の際のできごとを扱った文と何ら違っているところがないのは言うまでもない。*The Aran Islands* におけるシングの視点が Anglo-Irish 特有の「イギリスの伝統にはないものをアイルランド文化として強調する」姿勢を抜け出してはいない証拠の一つがここにある。又、イエイツはこうしたアイルランドの特質を賞讃する理由として 'reaction against the materialism of the nineteenth century'¹⁷ と述べているが、シングの理由も又そこにあったことはすでに書いた。だが、それ以上に問題なのは島民に対する関与の仕方であろう。物質主義を否定し、人間の素朴な営みを賞讃することはナショナリストとしても自然な価値判断だと思われる。ところが、シングはアラン諸島の中でも 'the life is perhaps the most primitive that is left in Europe' (53) である Inishmaan を最も愛し、本島の Aranmore (実は Inishmore) を 'the falling off that has come with the increased prosperity of this island is full of discouragement' (116). として敬遠している。この島が 'civilization' の波に呑み込まれていく現実を目の当りにしたからであった。島が住み易くなればそれだけ 'primitive' な想像力、豊かな人間関係が失われていくことは事実であるが、その現実から目を背けるシングの姿勢にわれわれはある種のジレンマを感じざるを得ないのである。彼が描いたアラン島がそこに住む島民の実態とはかけ離れた理想的な島として描かれているのではないかという疑問が残るからである。

従って、シングの Inishmaan への傾斜、そこに住む人々との交わりは sympathy に根ざしたものであるというよりはむしろ、アイルランドの核にまで昇華させたいわば楽園とも言える 'dreamland' への逃避にすぎなかったのではないか。再度の訪問に際して彼は前年 Inishmaan で撮った「写真やこまごました送り物」(106) を持参し、島民を喜ばせ、三度目の訪問には写真の珍しさが失くなったとあって、彼らの前で「芸当や手品」(128) を実演して見せて関心を魅きつける。そして四度目には島民の興味を繋ぎ止めようとしてバイオリンまで持参したり (151) する。こうした積極的な島民への参加の姿勢は訪問が重なるにつれて増幅され、親交も深まっていく。それにつれて、彼らの中のシングの存在も重要になっていく。文盲の老婆に手紙を読んでやったり (107)、外界のニュースを話してやったりする (78, 138)。島民の中での確実な存在感はシングにとっては何よりも魂を満足させるものである。'A human being finds a resting place only where he is in harmony with surroundings'¹⁸ という言葉から自らの休息場所を見出したと信じるシングの感慨が窺える。又、こうも言っている。

If anything serious should happen to me I might die here and be nailed in my box, and shoved down into a wet crevice in the graveyard before any one could know it on the main-

land. (110)

このような、憧憬と逃避的願望を合わせもった記述から、われわれは Anglo-Irish Ascendancy が宿命的に背負っている孤独、疎外といった煩らわしさから逃れたいと願うシングの心理を読みとることができる。Daniel Corkery が言う「父祖の土、精神的な安息所探求」¹⁹としてのアラン島解釈はそうした意味で間違いではない。

だが、アイルランドの核として理想的な世界にまで高められたアラン島はその虚構性の故にシングの覚醒を促す。島民との打ち解けた交わりの間も彼は心の間に分け入ってくる疎外感をかくすことができない。

There is hardly an hour I am with them that I do not feel the shock of some inconceivable idea, and then again the shock of some vague emotion that is familiar to them and to me. On some days I feel this island as a perfect home and resting place; on other days I feel that I am a waif among the people. (113)

島民とのこのような違和感は異郷の地で誰しもが感じる類のものであるかも知れない。しかし、シングにとってそれはアイルランドにおける自らの位置を嫌おうなく認識させるものであった。そこには nightingale やギリシア壺の世界に憧れ、その世界との一体化を試みつつも果せず、現実へと引き戻されたロマン派の詩人と共通した心の動きがある。つまり、ロマンティックな動機でアイルランドを理念的に捉え、そこにアイデンティティを見い出そうとする現実不在の姿勢そのものに問題があるわけで、シングがそこから覚醒し自己の立場を改めて認識する結果に終わったことは当然といえば当然のことであった。滞在の日数が重なるにつれてこの認識も次第に大きくなり、島を離れる頃になるとシングは次のように言う。

I became indescribably mournful, for I felt that this little corner on the face of the world, and the people who live in it, have a peace and dignity from which we are shut for ever. (162)

シングがこのように限界を感じ、かつ度々口に出していたことを捉えて、彼がイエイツを初めとする他の Anglo-Irish 作家とは異質であり、作品自体を単なるナショナリストの書いたものでなく、純全たる patriot による作品であると主張する Daniel Corkey のような意見²⁰もないではない。19世紀半ばに起こった飢饉を契機として農村社会が崩壊しつつあったアイルランドを考えれば、*The Aran Islands* でシングが描いた「自然と共存し、精神と肉体の調和した」アラン島民の姿は現代人だけではなく、アイルランド本土の農民が失いつつある美点には違いなかった。唯、シングの指摘が農民（島民）の側に立った sympathy に根ざすものであったかということになると多少の疑問を

抱かざるを得ないのだ。その意味で、作品は深い洞察力に満ちてはいるが、島民に対する作者の目は好奇心からくる観察の域を出ていないとは言えないか。Ann Saddlemyer が指摘するように、「観察者自身の個人的な内面の記録」²¹の域を出ることはなかったのではないかと思えるのである。

III

こうして *The Aran Islands* で再認識することになった Ascendancy としての立場をシングが *In Wicklow, West Kelly, Connemara* の中で完全に払拭し得たかという点、勿論、問題がないわけではない。'In Wicklow' 中の記述の一つは明らかにシングの出自に対する思いを如実に語っている。シングは Wicklow のある老婆が旧地主に対して、'curious affection' を抱いているとして、'an old woman...told me, with tears streaming on her face, how much more lonely the country had become since the 'quality' had gone' (211-12). と述べていて、旧地主階級の功績についてこう書いている。

Everyone is used in Ireland to the tragedy that is bound up with the lives of farmers and fishing people; but in this garden one seemed to feel the tragedy of the landlord class also, and of the innumerable old families that are quickly dwindling away. These owners of the land are not much pitied at the present day, or much deserving of pity; and yet one cannot quite forget that they are the descendants of what was at one time, in the eighteenth century, a high-spirited and highly-cultivated aristocracy. (230-31)

この箇所を捉えて、Robin Skelton は 'He, like Yeats, had a "dream of the noble and the beggarman"'²² と見なし、Nicolas Grene は 'With a shrug of indifference Synge left Anglo-Irish dead to bury their dead and turned to those parts of Irish life where he still saw vitality'²³ と考えている。しかし、Wicklow はシングにとって一族の反映、没落とは切り離すことのできぬ土地であり、彼がこの荒廃した館跡に立ってノスタルジックな思いに浸ったとしてもそれは不思議ではない。彼がここで言おうとしているのは、地主階級、農民階級にこだわらず、広い意味での近代化の波に押し流されていくアイルランドの伝統そのものに対する悲しみなのである。ここでは Anglo-Irish に対するナショナリズムを表明してもいないし、Anglo-Irish の文化を逆に否定しているわけでもない。その点で、ここに 'the feeling of pervasive blight and frustration twined with regret at the passing of something unique and valuable'²⁴ を感じとっている Alan Price の指摘は全く正しい。シングが Ascendancy に認めるのは彼らが創り出した文化そのものであり、伝統的にもつ制度ではないのである。さらに、こうした Ascendancy の属性を論じた箇所は全体を通じてここだけであり、しかも言質的には批判的態度をとっていることを考えると、この記述自体がシングと農民との距離をさらに引き離すことにはなり得ないのである。

そこで三篇の紀行文全体に目を通してみると、共通して感じるのは、*The Aran Islands* とは全く異なり、手離しで農民を賞讃しそこに自己投入しようとするところが見られないことである。一つ

にはアラン島で前兆に気づいていた「農民の目付きを変え、階級を生み出す」(116, 140) 'civilization' の波が本土に浸透しきっていたためであろう。商業主義に隷属した農民は本来の性質を失い、中産階級の搾取の下で貧しさに喘いでいた。この緊張関係の中で疲弊していく農民の現実がシングの覚醒をさらに強めたと思われる。又、これら紀行文の執筆時期と彼の農民劇上演の時期と重なり合っただけでも見逃せない理由である。カトリック中産階級を中心とした民族派のナショナリストからの執拗な攻撃があり、急先鋒に立った Arthur Griffith などはシングを 'as utterly a stranger to the Irish character as any Englishman who has yet dissected us for the enlightenment of his countrymen'²⁵ とさえ非難した。このような攻撃を受けたシングは農民に対する姿勢を理想的な見方から現実的な見方へと変更せざるを得なかったように思える。だが、現実の農民の姿を見据える時にも、一方にあるのは Inishmaan の人々の伝統を生きる姿であった。

むしろ、そうした価値基準があったからこそそれを失った農民に対する深い憐れみと sympathy を抱くこともできたのである。いずれにせよ、農民の貧困と精神的疲弊から目を逸らさないリアルな描写はシングが Angl-Irish 作家特有のロマンティックな姿勢を捨て農民へ一歩近づき得たことを示唆しているのだ。

さて本文だが、三編を通じたテーマは農民社会の崩壊と伝統の喪失からくる農民の不毛な精神生活である。その意味からすれば、アイルランド本土の農民はアラン島民とは対極に位置していると言える。一例として、自然と農民との関係を較べてみよう。アラン島の自然は島民の肉体的生命を脅かすものとしてあり、この死との隣り合わせの生活が彼の心に緊張を引き起し、悲劇的な宿命感を抱かせていた。そのような自然に抵抗する術もなく黙々として運命を受け入れる島民にシングは尊厳的なものすら感じとっていた。ところが、本土の自然はそこに住む農民にとって、その精神的生命を脅かすものとして存在している。一年のうちのほとんどを雨と風と霧に包まれた Wicklow の暗く寂しい自然は農民たちの魂を奪い去ってしまう。

This peculiar climate, acting on a population that is already lonely and dwindling, has caused or increased a tendency to nervous depression among the people, and every degree of sadness, from that of the man who is merely mournful to that of the man who has spent half his life in the madhouse, is common among these hills. (209)

風は木々を鳴らして彼らの恐怖心を誘い (209)、それが因で彼らは夜になると沼に亡霊を見 (189)、雨を避けて集まってくる羊の吐息に死者の声を聞き (192) 霧の中を走る兎の姿を巨大な化物と見誤ったりする (234)。自然と自然のつくり出す様々な現象に対して彼らは脅え、始終おどおどして暮している。それが昂じると、はなはだしい場合には精神に異常をきたすことになる。'The madhouse, which they know better, is less dreadful' (217) というように、精神病院でさえ、日常の延長として捉えているところに彼らの不毛な精神性がある。だが、こうした不毛な精神的土壌を生み出したのが自然の厳しさであったかということ、そうではない。これが人為的に創り出されたものであ

ることは老人の懐古談から推察できる。

I remember when you'd see forty boys and girls below there on a Sunday evening, playing ball and diverting themselves; but now all this country is gone lonesome and bewildered, and there's no man knows what ails it. (210)

かつてはここにも Inishmaan にみられたような、自然と共調して生きる農民たちのコミュニティがあったはずである。自然現象の中に人知を超えた妖精たちの住む世界をみる豊かな想像力をもって生活する農民たちがいたのである。彼らは 'three shadowy countries that are never forgotten in Wicklow—America (their El Dorado), the Union and the Madhouse' (216) の何れかへ行ってしまい、ここに残っているのは動けない老人、女性、子供たちが主である。農民の伝統的なコミュニティの衰退は、飢饉の後、地主と農民の間に起った土地戦争による旧秩序の崩壊、イギリス諸島全域に及んだ19世紀末の農業不振にその端を発しているが、代替産業のないアイルランドでは農民たちは季節労働者としてイギリスに渡るか、アメリカへ移住するしか生きる道がなかったのである。²⁶

そうした情況は Wicklow に限らず、West Kerry でも Connemara でも同じである。

Here and there on this headland there are little villages of ten or twenty houses, closely packed together without any order or roadway. (246)

Wherever there are a few cottages near the road one sees barefooted women hurrying backwards and forwards, with hampers of turf or grass slung over their backs, and generally a few children running after them... (286)

このような 'utter loneliness and desolation of the place' (253) が引き起こす閉塞的な精神状態から農民が逃れる神は vagrant や tramp などの放浪者との行きずりの会話 (216) であり、地方巡行のサーカス公演 (242) を見ることであり、様々な市、それに酒である。アラン島民が大人しく、飲酒にひたることがまづなかったのとは逆に、本土では、スポーツの試合に出駆けた若者たちは、 'all drunk coming back, fighting and kicking in the canoes' (251) の状態になり、又草競馬の後では勝ち負けを論じて大騒動 (great sport) が繰り広げられ、死者まで出る (275)。それが、彼ら農民が無意識のうちに学んだ逃避の衝動であったとするなら、それは余りにも悲劇的であると言わなければならない。時折り自然がみせる美しさがそれを感じさせない (246) だけに、その悲劇性が倍化されることになる。

従って、農村社会に農民たちがよって立つ伝統を取り戻すことが彼らの心を活性化し、ひいては彼らを現在の悲劇的情況から救い出すことになる。シンゲは考えるのである。彼は Connemara の章で、貧困の原因がコミュニティの崩壊、農業不振に許りあるのではなく、農村を取り囲む社会の制度、偏見に根ざした対策の甘さから生じていることを指摘し、農民救済のあるべき姿を提言して

いる。まず、彼は改革を行なう際の問題点について述べる。

One's first feeling... is a dread of any reform that would tend to lessen their individuality rather than any very real hope of improving their well-being. One feels then... that it is part of the misfortune of Ireland that nearly all the characteristics which give colour and attractiveness to Irish life are bound up with a social condition that is near to penury...(286)

救済は個性、即ち伝統を十分に考慮して行なわなければならないとシングは言う。

しかるに、政府による救済事業は「農民は怠惰である」(309)という役人自身も持っている旧来の偏見(231)と軽蔑のために実態を無視して一方的に行なわれる傾向がある。産業振興を企図して建設された 'lace school' もそこで支払われる賃金はアメリカ移民の旅費に使われる(294)。貧農救済のために行なわれる道路建設工事も一日につき1シリングの金が支給されるが、家長が半ば強制的に召集されるため、より高率的な海草肥料(kelp)製造も不可能になっている(298)。又、農地解放は小作人に土地所有の夢を実現させるものとはなったが、実際はやせた荒地を細切れに分割しているのが現状であり、一家族を養うに足る収入が上らず、効果的ではない(314)。さらに、屋根を茅から鉄製に葺きかえる等の住宅改善も、家畜と同居し同じ井戸から飲料水を得るような不衛生的な生活習慣を改めない限り何の役にも立たない(315)とシングは指摘する。その場凌ぎの性急な改革は農民生活の良い面をも奪い去るからである。

Traditions of this kind are destroyed for ever when too sweeping improvements are made in a district, and the loss is a great one. If any real improvement is to be made in many of these congested districts the rearrangement and sale of the holdings to the tenants... must be carried out on a large scale; but in doing so care should be taken to disorganise as little as possible the life and methods of the people.(314-15) (イタリック体は筆者)

シングがここで言っている伝統というのは農民の労働の喜びである。道路建設工事に駆り出された農民たちが 'a band of convicts' (296) の如き印象を与えているのはこうした政府の救済事業が彼らの生活の実態を踏まえたものではないことを何よりも良く物語っている。逆に、kelp 製造や茅葺き屋根の葺きかえ作業は彼らにとって喜びとなっている。そこには、農民のコミュニティが一体となって行なう伝統的な共同作業の充実感と自然と一体化した喜びがある。

The whole scene, with the fresh smell of the sea and the blueness of the shallow waves, made a curious contrast with the dismal spectacle of the relief workers we had just passed, for here the people seemed as light-hearted as a party of schoolboys. (308)

In many districts the thatching is done in some idle season by the men of a household themselves, with the help of their friends, who are proud of their skill; and it is looked on as a sort of a festival where there is great talk and discussion.(314)

こうした農民本来の姿を維持しつつ、改革を行なうことが彼らの生活上の基本であるとシングは考えるのである。だが、この労働の喜びを回復することだけを主張すれば、シングに審美的な田園趣味しかない²⁷と言われても仕方のないことだが、中に収められた“Possible Remedies”の項を読めば、彼の主張があながちロマンティックな観点からだけのものではないことが解る。

その中で、このような労働の喜び——農民の自信——を取り戻す改革のあり方をシングは具体的に論じている。まず、一時的な収入は得ても7～8年に一度は必ず襲ってくる天候不順のために貯えを失くしてしまう実情を把握したうえで、悪天候に強い種芋の品種改良の必要性を力説する(339)。品種改良はじゃが芋を主食とする農民の生活を安定させるだけでなく、養豚による収入をも保証する(340)。又、地主の農地の放出がやせた土地に集中しているため、改良の目的を果していない点を指摘し、地主に肥沃な土地を放出させるような予算の拡大を提言する(341)。さらに、海上交通網の充実が生活用品の価格安定に繋がるだろうと考える(340)。このような改革は農民のもつ‘traditional views and instincts about agriculture and live stock’(340)に即したものであり、非現実的なものではない。自道で腰をすえた改革こそ、コミュニティに活気と魅力を取り戻し、‘lace school’などの産業振興事業も当初の目的を果し、移民の問題も解決されるのではないかとシングは考えるのである。事実、救済がうまく根づいた地域ではかつての活気が甦ってきているのである。

Happily in some places there is a counter-current of people returning from America. Yet they are not very numerous, and one feels that the only real remedy for emigration is the restoration of some national life to the people. It is this conviction that makes most Irish politicians scorn all merely economic or agricultural reforms... (341–343)

コミュニティ崩壊の元凶が人口流出にあったことを思い起こせば、農民としての自信を取り戻すことは即ち、アイルランド民族としての誇りを回復することに他ならない。これが人間本来の生き方‘primitiveness’を回復することは言うまでもない。このシングの主張が時代に逆行するものではなかったことはシング以後のアイルランドが、正にこの民族固有の文化、伝統を謳い文句に民族自決を目指したこと²⁸からも窺えるのである。

こうしたシングの記述をみる限り、イエイツの‘he was the only man I have ever known incapable of a political thought or of a humanitarian purpose’²⁹というシングの人物評は全く的はずれであったと言わねばならない。確かに、シングは政治活動に身を投じることもなく、政治的発言はごく僅かである。それは政治自体がもつ人間関係の複雑醜悪な側面、言葉を弄するだけの非現実的な側面を嫌ったためであろう。例えば、上述の移民問題を論じた箇所でもこう述べている。

They go as much from districts where the political life has been allowed to stagnate as from districts where there has been an excess of agitation that has ended only in disappointment'

(341)

ここで彼は政治運動がこと移民問題について何の効果も上げていないことを看破しているのだ。その点では確かに政治とは無縁であった。しかし、彼が紀行文の中で力説したアイルランドの伝統とその価値の問題は、すでに指摘したように *The Aran Islands* での若干の姿勢の問題はあったにしろ、政治性をも包含した民族の問題であった。それがいかに本質をついたものであったかは、純全たる農民作家 Padric Colum をして言わしめた言葉、'his work arguments the spirit by discovering and revealing to us the national virtue'.³⁰ を見れば明らかであろう。シングがゲール語を通して農民と直接交流したこと、言わば、農民の心の中に分け入った洞察ができたこともその一因であろう。共に Connemara を取材した J.B. イェイツも指摘するように、農民一人一人がシングに対しては心の壁を取り払って真実の思いを語った。³¹ そのためシングは彼らの現実を十分に踏まえた理解ができたのではあるまいか。そこには政治的な偏見も文化的な相違も問題にならぬ程の純粋な農民理解があった。1907年、「農民を全く知らぬ」として批判されたシングは MacKenna に宛てて、'As you know I have the wildest admiration for the Irish Peasants, and for Irish men of known or unknown genius-?'³² と書いているが、ここにわれわれは何の粉り気もなく農民を愛したナショナリストとしてのシングを見ることができるのである。

〔付記〕 本稿は日本英文学会第38回九州支部大会（於福岡教育大学，1985年10月5日）において口頭発表した内容に加筆したものである。

[注]

- (1) Alan price, ed., *J.M.Synge, Collected Works*, Vol., II, (London: Oxford U.P., 1966) pp. xiii–xiv.
(2) イェイツは1923年、ノーベル文学賞記念講演の中でアイルランド文芸復興を通して目指したものについて次のように述べている。

When we thought of these plays we thought of everything that was romantic and poetical, because the nationalism we had called up—the nationalism every generation had called up in moments of discouragement—was romantic and poetical (W.B.Yeats, *Autobiographies*, London: Macmillan, 1955, p.560)

- (3) イェイツは自分の要求がかなえられないと知ると「序文」を全集から外して Cuala Press から独自に出版した。シングに対する評価が余程、確固としたものであったことを示唆している。

W.B.Yeats, *Essays and Introductions* (London: Macmillan, 1961) p.319.

- (4) W.B.Yeats, *Autbiographies*, op. cit., p.344.

- (5) Lady Gregory は *Our Irish Theatre* (1913)でイェイツの言葉を裏づけるような次の一文を書いている。

'He seemed to look on politics and reforms with a sort of tolerant indifference, though he spoke once of something that has happened as "the greatest tragedy since Parnell's death."' (Lady Gregory, *Our Irish Theatre*, 1913; rpt., New York: Capricorn Books, 1965,p.123)

又、John Masfield は同様に「保守的な人物」としてのシング像についてこう語っている。

'He was the only Irishman I have ever met who cared nothing for either the political or the religious issue.' (John Masfield, "John M. Synge", 1915; rpt., in *J.M.Synge: Interviews and Recollections*, London: Macmillan, 1977, p.80)

さらに活動家の Arthur Lynch とシングの意中の人物であった C.H.Houghton は「隠健なナショナリスト」としてのシングについて各々次のように語っている。

'Synge was, I believe, only mildly Nationalist. I cannot speak with certainty on this point, for although he was a visitor at our house, I seem to have no recollection of having ever discussed politics with him.' (Arthur Lynch, 'Synge', 1928; rpt., *ibid.*, p.13).

.....

'He spoke of having met Miss Maud Gonne at Irish meetings... He was interested in those meetings, but when he found that they were prepared to go any length to gain their ends, he felt he must drop out. He was not an extremist'...' (C.H.Houghton, 'John Synge as I know him' 1924; rpt., *ibid.*, p.5.)

- (6) Stephen MacKenna, 'Synge', 1928; rpt., *ibid.* p.14

- (7) W.B.Yeats, *Autobiographies*, op.cit., p.520.

- (8) *ibid.*, p.567.

- (9) G.J.Watson はイェイツとシングの文学的出発点を次のように規定している。

Yeats and Synge clearly begin by trying to reject their 'English' aspects, attempting to break with the strict affiliations of their Anglo-Irish status (*Irish Identity and the Literary Revival*, London: Croom Holm, 1979, p.32)

さらに、Daniel Corkery はナショナリズム熱の高まりの中で、アイルランドの作家たちもそれを無視できなかった点を指摘し、Anglo-Irish の作家であるシングがナショナリズムへと転向していったと想定して次のように書いている。

This was the period in which John M. Synge wrote his works. Even had we no evidence from himself or from his friends as to his conversion to nationalism, we could almost with certainty deduce it from what we know of the condition of the land to which, aged, say, twenty-seven, he returned. If all or practically all the writers of his time were travelling in a certain direction, it is not presumptuous to suppose that he also came under the same influences (*Synge and Anglo-Irish Literature*, 1931; rpt., New York: Russell and Russell, 1965, p.52).

又、山田正章氏も「"Sing the Peasantry"—Yeats の Irish Background について—」, 日本英文学会, 『英文学

研究』(Vol. LV II, No. I, 1981), pp. 161-63 で, Anglo-Irish 作家の宿命的ナショナリティの問題について詳述しておられる。

(10) 拙稿, 「W.B.Yeats と Anglo-Irish Tradition ——Robert Gregory 追悼詩篇を巡って——」 鹿児島県立短期大学人文学会論集, 『人文』(第7号, 1983) pp.5-6.

(11) Alan Price, ed., *J.M.Synge, Collected Works*, Vol.II, op. cit., p.13.

以下, 本文, 引用後の数字はこの版によるものである。

(12) Ann Saddlemyer, ed., *The Collected Letters of John Millington Synge*, Vol. I (London: Oxford U.P., 1983) p.47.

(13) W.B.Yeats, 'A Poet's Memories', *Freeman's Journal*, 26 January 1924. quoted by Donald Torchiana in *W.B.Yeats and Georgian Ireland* (Evanston: Northwestern U.P., 1966)p. 67.

(14) Daniel Corkery, *Synge and Anglo-Irish Literature*, op. cit., p.44.

(15) Nicholas Grene, *Synge: A Critical study of the Plays*, (London: Macmillan, 1975) p.17.

(16) W.B.Yeats, *Essays and Introduction*, op. cit., p.178.

(17) W.B.Yeats, *ibid.*, p.187.

(18) From Synge's manuscripts quoted by Ann Saddlemyer in 'Art, Nature, and "The prepared Personality"' in S.B.Bushrui ed., *Sunshine and the Moon's Delight*, (Beirut: The American Univ. of Beirut, 1972) p.110.

(19) Daniel Corkery, *Synge and Anglo-Irish Literature*, op. cit., p.121.

(20) *ibid.*, p.46.

(21) Ann Saddlemyer, *Sunshine and the Moon's Delight*, op. cit., p.107.

(22) Robin Skelton, *The Writings of J.M.Synge*, (London: Thames and Hudson, 1971) p.110.

(23) Nicholas Grene, *Synge: A Critical Study of the Plays*, op. cit., p.5.

(24) Alan price, *Synge and Anglo-Irish Drama*, 1961; rpt., New York: Russell and Russell, 1972) p.92.

(25) Arthur Griffith, *The United Irishman*, 17, October, 1903. quoted by D.H.Greene and E.M.Stephens, *J.M.Synge: 1871-1909*, (New York: Macmillan, 1959) p.148.

(26) J.C.ベケット 『アイルランド史』, 高橋裕之, 藤森一明訳 (東京, 八潮出版, 1972) p.204。

(27) Nicholas Grene はシングの農民理解が都会人の目から見たものに過ぎないとして, 次のように述べている。

'Knowing whose the cattle were, what fair was to come' has a different significance for those who have owned cattle or sold them at a fair, than for those who only look on. Synge know these things, but he know them as a stranger. His attitude to the countryside was not that of a man tho had grown up in it, had owned land or worked on it. It is rather that of the naturalist, of the city child who from an early age is fascinated by nature.' (Nicholas Grene, *Synge: A Critical Study of the Plays*, op. cit., p.16.)

(28) 例えば, 1973年に制定されたアイルランド (エール) 共和国憲法の最初の条文でも民族の伝統を重視することが謳われている。

Constitution of Ireland, Article 1: 'The Irish nation hereby affirms its inalienable, indefeasible, and sovereign right to choose its own form of Government, to determine its relations with other nations, and to develop its life, political, economic and cultural, in accordance with its own genius and traditions.' (*Constitution of Ireland*, Dublin: Cahill, undated.) p.4.

(29) W.B.Yeats, *Autobiographies*, op. cit., p.567.

(30) Padric Colum, *The Road Round Ireland*, 1926, quoted by Alan Price in *Synge and Anglo-Irish Drama*, op. cit., p.32.

(31) Jack B.Yeats は取材中のシングを回想して次のように語っている。

His knowledge of Gelic was a great assistance to him in talking to the people. I remember him holding a great conversation in Irish and English with an innkeeper's wife in a Mayo inn... I think the Irish peasant had all his heart. He loved them in the east as well as he loved them in the west, but the western men on the Aran Islands and in the Blaskets fitted in with his humour more than any—the wild things they did and said were a joy to

池田：J. M. Synge の紀行文におけるナショナリズムの問題点

him. (Jack B. Yeats, 'A Letter about J.M. Synge' in Alan Price ed., *J.M. Synge, Collected Works*, Vol. II, op. cit., pp. 401-402.

(32) Ann Saddlemyer, ed., *The Collected Letters of J.M. Synge*, Vol. I, op. cit., pp. 329-30.

(昭和60年9月12日受理)